

## 和本の市場

橋口 侯之介（誠心堂書店）

### 和本の市場・古典会の創立

和本を中心とした専門書の古書市場がある。東京では、それを東京古典会と呼び、神田の古書会館で開かれる。わたしの店は、ほとんどここで仕入れる。店から歩いて十分足らずの所で、全国から和本類を集めた市場が毎週火曜日に開かれるのだから、こんなありがたいことはない。

京都にも京都古典会、大阪では大阪古典会がそれぞれあって、同じように活動している。この市場は地域の古書組合（正しくは古書籍商業協同組合）というが、誰も日常ではそう呼ばない）に所属していて、そのもとで活動している。組合は都道府県単位で設立されているが、そのいずれかに組合員として登録してあれば、全国どここの市場でも利用することができる。だから、地方の本屋さんがいれた本を、神田の市場に出品することも、京都の市場に珍しい本が出ると聞けば東京から何人も本屋が駆けつけるといふことにもなる。まとまった和本が入荷したときや、年に何回か開かれる特選

市というところ、その出品リストが目録になって送られてくるので、全国規模で本屋たちは動くのである。この便利な市がいつできたかというところ、意外に知られていない事実がある。

東京古書組合は、大正九年（一九二〇）に結成された。組合の目的には古物商として警察当局への防犯協力という建前があつたが、当初から古書の常設市場を運営することにあつた。

『東京古書組合五十年史』（昭和四十九年、東京都古書籍商業協同組合刊）によれば、それまで貸席を利用して開かれていたいくつかの定市じやういちのうち、神田・本郷の市が統合して大正五年に神田小川町にできた東京図書俱樂部で行なうようになった。定市というのは、定期的に開催されるものをいい、臨時に開かれる売立うりだてなどと区別される。この図書俱樂部の新築が機運となつて古書組合が結成されたのだ。

しかし当時、郊外を含めてまだ十五以上の貸席による定市があつて、それらがすべて組合の公認になるには、しばらく時間がかかった。公認というのは、組合員なら誰でもこの市場も利用できる現代と同じ仕組みのことである。それができない所では、同人色が強く、排他的な一面があつた。東京古典会は、これより少し前の明治四十五年（一九一七）に創立された。まもなく二〇一二年に百周年を迎えることになる。

『東京古書組合五十年史』の中では、弘文荘の反町茂雄氏が「東京古典会史」を書いておられるが、それによれば、都内のあちこちに自然発生的に



行なわれていた市会のうち、比較的有力だった神田の青柳亭・本郷の志久本亭を会場にした市が合併して明治四十五年、東京書林定市会になったのが始まりだとい

う。主体は当時セドリだった人たちで、彼らが東京中を歩いて入手してきた本を下町の中心的な本屋に精一杯高く買ってもらう目的だった。それが大正末年には古書組合の公認となった。

セドリというのは、店を持たずに、業者間やよその市を回って安い本を見つけ、それをしかるべき店に高値で引きとってもらうフリーの仲買人のことである。江戸期の史料にも散見するし、明治期には彼らの活躍が古本流通に大きな役割を果たした。

大阪古典会では二〇〇七年に百周年記念行事をおこなったので東京より数年先輩である。しかし、この「創立」とか「できた」というのを、どう

判断したのかは実は曖昧である。古書組合は古物商取締法という法律にのっとって認可された年をいうのだが、古典会のような組織にはそのような決まりが無い。そもそも組合から公認されているとはいえ、その運営は独立していて、いわば任意の団体、同人組織にすぎなかった。この同人時代の市場の何をもって東京古典会の発祥とするのか、はつきりとしていないのだ。

### 江戸期からあった古書市場

江戸期の史料を見ていくと、現在と変わらない古書市場がしっかり存在していたことがわかるので、むしろ百年よりさらにさかのぼるとわたしは考えている。東京書林定市会の前身の貸席の市より、さらに古い市場があったのである。

ところが、これまで自分たちの業界自身がそうした認識を持ってこなかった。『東京古書組合五十年史』中の「明治初年の古書業界」では、明治二十年代に定市会ができるまで、「(江戸時代には)古書籍の流通機構としての市場の存在は考えられない」と言い切っている。そのため、今でも多くの古本屋は、江戸期には古本の市は存在せず、現在の古典会などが百年とっているのが起源だろう位に考えて思考が止まっている。まして、業界外の人にはそれ以上の認識はないだろう。

しかし、関西の本屋さんたちは、とうに知っていた。蒔田稲城まきたいなぎが書いた

(この人がどういう方なのか実は知られていない。) 存知のかたはご教授願いたい) 『京阪書籍商史』(昭和四年、高尾書店、初出は『日本出版大観 上巻』)には、「世利分會」という一章を設けて紹介している。

それによれば、書籍商が書物の売買取引をする機関として世利分會、すなわち「市立」が古くからあった。京都でも世利市會といって本屋と世利子によって市場取引が行なわれていた。世利子というのは、小さな店か店を持たないで本を売買する者のことで、本屋に付属する形で登録されていた。これがセドリの起源である。享保十五年(一七三〇)には、この市に参加する世利子について江戸本屋仲間からの注意書きが残っていることからも、十八世紀前半には、三都で存在していたことが伺える。

一七七〇年代の安永頃には、同業者組織である本屋仲間が市場を開く権利を「市株」として公認し、市場からの収益のうち一定額を仲間に上納する制度を確立する。市場は「板木市」と「本市」とに分けられ、市株を持つている者(会主)が主催した。また、大衆本である草紙類は別の組織となっていた。とくに板木市で売買されると、出版権である板株が異動するので、本屋仲間ではそれを管理する原簿を修正した。そのためにも市場が公認の場であればならなかったのだ。

こうした動きの細かい記事が大府立中之島図書館編『大坂本屋仲間記録』に載っているのです、十八世紀後半以降の世利分會のことが大坂に関するてはかなり復元できる。たとえば、市場で売り手から徴収する手数料を現

在は歩金ぶきんというが、江戸期も歩銀といっており、明治以降の市場から現在に至るまで5%である。江戸期も五分と記録にあり同じだった。会主はそこから一分を仲間に上納するが、現在でも5%のうち3%を組合に納めるのと考え方は同じである。

大坂の記録から断片的に京都や江戸の様子もわかるので、将来は三都全体の市の様子をもっと明らかにすることができるだろう。

また、江戸や京都の本屋の日記が一部残っているが、それを読むと新刊以外の本がどのように取引されていたかがよくわかる。江戸期の本屋というのは出版もするが、それだけでなく新刊書店でもあり取次(問屋)でもあり、また古本屋でもあった。本の総合的な商売をしていたのだ。その中の古本業務の実態については、現在「古書通信」誌上に「江戸の古本屋」と題して連載しているので、お読みいただきたい。

そこでは、本屋の営業のうち古本部門の占める割合は大きいもので、日記を残していた京都の名門店・風月荘左衛門は、売り上げの大半が新刊販売でなく、古本を集めていくつかの藩などの大口顧客に納入することで占められていた。その品揃えのためには、新本や長崎から新規に輸入されてくる新渡り唐本だけでは足りず、写本を含めて各種の古本を市場などから大量に仕入れる必要があった。日記にはどの市場から、いくら買ったという記事が載っている。

明治初期に、古物取締の関係で新刊書店と古本屋が分離したこと、出版

や取次を手がける本屋が個人営業でなく会社法人化していったことなどから、近代の書籍関係業者は、それぞれまったく別の組織になってしまった。その形態に慣れた眼で江戸期の本屋を見るせい、その総合性がよく理解されず、江戸期の本屋という出版だけの研究に偏る傾向がある。口を酸っぱくしていいたいのは、江戸の本屋は、出版だけでは生業として成立たない。他店の新刊卸や小売のほかに、古本売買が大きな収入源となっていたのである。江戸期の本屋は、古本屋という専門店があつたわけではない（そういう店も少しはあるが）。どの本屋も、総合的に活動していた。

だから、「（江戸時代には）古書籍の流通機構としての市場の存在は考えられない」などという偏見は早く捨てて、もっと深く研究すべきなのである。当時の本は、つまり和本だから、その市場は現代の和本専門市・古典会の直接の先祖なのだ。十七世紀末に創業したと伝える浅倉屋久兵衛は、現在も十二、十三代目が浅倉屋書店として古典会の会員であり、連綿と商売を続けている。そこから見たら、江戸も明治も平成も同じ感覚で和本を扱っていることだろう。

## 本屋にとって市場とは

江戸期の本屋を見ると、さらに書画や骨董まで扱っている。薬も併せて売るのは、以前から指摘されていたことだが、幅の広い商売をしていたのだ。そのため本だけでなく、道具市や書画市もあつて、得意とする本

屋が会主になっていた。本や板木の市場には講の仲間だけの小さな集まりから、不定期な売立、そして唐本専門市もあつた。むしろ盛んであつたのだ。

本屋の仕事は、本の品揃えをよくすることである。現代のように取次から毎日洪水のように新刊が運ばれてくるのは商売の方法が違う。自ら古本、書画、版本ばかりでなく、写本まで含めた広い書物類の収集を心掛け、そのために眼を肥やす努力も怠らず、公私の各種古書市場、顧客との交流、同業者同士のつきあいなど様々な活動をこなす。

その品揃えには、蔵書家から直接買入れれることもあるが、それは不定期なので、いつどのような本が入るか予定が立たない。その点、定期的に開かれる市は、ありがたい存在である。入札や競りで決まるため欲しい本が望んだ価格で買えるとは限らないが、眼を肥やすことで、自分の専門領域、つまり得意な分野ができて、しだいに買えるようになってくる。

古書店にとって市場とは、仕入れの場であると同時に、勉強の場でもあるのだ。ここで力をつけていく。その機能は今も江戸期も変わらないと思う。明治時代、体制の変化に伴う時期を経て、現代の安定した古書市場があるのも、およそ三百年前から続いてきた努力の賜物である。この長い時間軸の中で培われたノウハウが今の私たちを育ててくれたのだと思う。古本用語の多くが江戸期を起源としたことばであることも、その意をますます強くするのである。